

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第201号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 2020年9月21日

ヤマガラ



2020. 4.17 札幌市厚別区 厚別北若葉公園

撮影者 藤 吉 功 (札幌市厚別区)



も く じ

函館鳥通信③ ハシボソガラスは落としたい

バー ドリサーチ	三上 かつら	2
愛しのSpecial Guest	札幌市豊平区 佐伯 武美	4
浦河町でのブッポウソウの記録		
	浦河探鳥クラブ 小田 左文	5
九州の鳥・北海道の鳥	福岡県 久留米市 池長 裕史	6
野幌森林公園におけるハイイロオウチュウの観察		
	江別市 池端 耕治	9
鳥獣保護管理法を読み解く－現在の狩猟とは？－ (その2)		
	国立研究開発法人 森林研究・整備機構フェロー 川路 則友	10
2019年度 北海道野鳥愛護会探鳥会記録 (2019.4～2020.3)		12
探鳥会あんない		15
表紙の鳥		15
鳥民だより		16

※本誌に掲載する写真のカラー版は、当会ホームページ(<https://aigokai.org>)で閲覧することができます。

函館鳥通信③

ハシボソガラスは落としたい

バー ドリサーチ 三上 かつら

ハシボソガラスによるクルミ割り行動、皆さんも一度は眼にしたことがあるのではないのでしょうか。この行動は1年じゅう見ることができますが、最も頻繁に見かけるのはクルミの種子が成熟する9月から12月の間です。この時期に電線や屋根にとまったカラスが、嘴に何か丸いものを咥えていたら大抵クルミです(たまにクリの実だったりしますが)。見つけたらしばらく観察してみると、カラスはクルミを咥えたまま飛び上がった後、電線にとまって下を見下ろしたりして、クルミを嘴からはなし、落として、割る、という行動を何度も繰り返します。何度かそれを繰り返してようやくクルミの殻が割れると、中にある美味しい種子(くるみパンに入っているくるみはクルミの“種子”です)にありつくことができます。より賢いカラスは、より確実にクルミの殻を割る方法を知っています。車の通り道にクルミを置いて、車にクルミを轆かせて割るのです。この行動は1980年代の仙台市で発見され、有名になりました(仁平1995など)。渡島管内七飯町でもこれをやるカラスがいます。

私も趣味でこのクルミ割りを観察しています。カラスが車の通り道に置いたり、上から道路に落としたりして車に轆かせた殻だと、クルミの殻も砕けますが、中の種子も粉々に砕けます(写真1)。カラスが自由落下で単純に落として割ったクルミの殻や種子は、そこまで砕けることなく大きいままであることが多いです(写真2)。自由落下で割れたあとのクルミの殻を拾って観察してみると、砕けて複数のパーツになることもあるのですが、たまに割れ口が非常に綺麗なものもあります。元々クルミの殻は2つのパーツが合わさったものですので、その合わさっていた2

つが外れた、ということを示します。なお、もしリスが食べたクルミの殻であれば、その合わせ目(縫合線といいます)あたりに齧った痕がみられるでしょう。カラスがクルミを割るまでのステップにいくつもの条件成立が必要なことと、確実に殻が割れることから、車を利用したクルミ割りがより高度で知的な方法だと考えられているのですが(総説として引用文献中の三上2016など)、私は自分が面倒くさがりなので「粒が大きくて食べるのが楽そうだ」という理由と、殻の割れ口が綺麗で気持ちいいので、自由落下のクルミ割りが好きです。そんな私の好みは胸の内にしまっているのですが、なぜか時々、近所のハシボソガラスが、我が家の駐車場に割ったあとのオニグルミの殻を置いていきます。

カラスはクルミ以外にも様々なものを上から落とします。たとえば貝を落として割って中身を食べてもいます。6月頃、道南の海岸付近を行動圏にしているハシボソガラスがツブを落として割っているところを見かけます(写真3)。クルミを割るときには、ハシボソガラスは6～10mくらいの高さからクルミを落とすことが多いのですが(荒ほか 2018)、ツブ落としはもっと低くて1.5～3mくらいでした。クルミの殻と貝殻では、硬度が違うのできっと高度も違うのですね。落とす回数も少ないです。オニグルミだと多いときは10回以上連続してクルミを落とすのに対し、ツブだと1回、多くてせいぜい数回です。勿論クルミのほうが貝殻よりもはるかに固いです。試行錯誤しているのですが、ツブを咥えて無駄に高く飛ぶわけではないところを見ると、合理的な高さが分かっているのでしょう。賢い鳥です。カラスは体の大きさに対して脳が大



写真1. 車に轆かせて粉々に砕けたクルミを食べるハシボソガラス



写真2. 自由落下で割れたクルミを食べるハシボソガラス

大きく、その比率はチンパンジーに匹敵するほどでもありますので、さもありなんです。

カラスが太陽光発電用のソーラーパネルに石を落とすことも報告されています(佐藤ほか 2018、日経クロステック記事<https://xtech.nikkei.com/dm/article/FEATURE/20140911/375933/> など)。ほかにも、カラスたちはソーラーパネルの上に石を置いたり、転がしたりもするようで、意味なく遊んでいるのかもしれませんが、気に食わなくてパネルを壊したいのかもしれませんが。人間の子どもが観察と実験を繰り返しながら世界を理解していくのと同じように、これは何だろう、と実験している可能性もあります。カラスの意図を確かめる術はありませんが、そうやってカラスがソーラーパネルを破損させた例もあります。ただし、この行動は一時的にはみられるものの、一定



写真3. 見つけたツブを上空から落とすハシボソガラス

の期間が過ぎると止むといわれています。遊びだからこそ、飽きたらやめるのかもしれませんが。

南太平洋の島国ニューカレドニアに棲息するカレドニアガラスは、木の隙間から虫を引っ張り出すために葉っぱを加工して道具を作ります。こういったカラス類の行動は、目的のために道具を加工したり利用したりするという点で、ほかの動物の賢さとは一段違った知能的行動として扱われます。そうすると、私たちが街中で見かけるもう1種のカラス、ハシブトガラスも賢いではないか、と気になる方もおられるでしょう。石罅を盗み、滑り台をすべり、様々な場所に食べ物やゴミのようなものを貯蔵します。ですが、実際のところ、野生のハシブトガラスは道具の加工や利用などをやりません。理由のひとつとして、「やる必要がない」ということが考えられます。ハシブトガラスは体が大きく、嘴も大きく、力も強いです。するとたとえば、細かい工夫をして木の隙間から餌を取り出さなくても、木を破壊して虫を捕ることができます。貝落としをしなくても、嘴でがつんがつんと殻を砕いて中の身を食べることができます。クルミの殻を割るのはさすがに無理なようですが、たまにハシボソガラスから略奪します。つまり、ハシブトガラスは知より力で解決できることがたくさんあるのです。したがって、細かい技術を使わずに済んでいる、というのが実態ではないかと個人的には思っています。力で負けるハシボソガラスだからこそ、知力を使わないと生き残れないのかもしれませんが。カレドニアガラスも、鳥という資源に限られた閉じた環境に棲息しているからこそ、知力を使う必要があるのではないかと考えられています。ところで、ミヤマガラスも野生状態では道具の加工や利用などはやらない鳥ですが、実験室でヒナのうちから育った個体に、課題を解かせてはじめて餌が得られる実験をさせると、針金を曲げるなど道具の加工をするようになります(Bird & Emery2009)。ハシブトガラスにも鳥小屋でパズルを解かせてみたら、ひょっとするとできるかもしれないですね。

引用文献

- 荒奏美・三上かつら・三上修 2018. ハシボソガラス *Corvus corone* の投下法によるクルミ割り行動. 日本鳥学会誌 67: 243-248.
- Bird, C. D., & Emery, N. J. 2009. Insightful problem solving and creative tool modification by captive nontool-using rooks. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 106(25): 10370-10375.
- 三上かつら 2016. 鳥類の採餌行動にみられる知能的行動. 江口和洋編『鳥の行動生態学』京都大学出版、京都.
- 仁平義明 1995. ハシボソガラスの自動車を利用したクルミ割り行動のバリエーション. 日本鳥学会誌 44:21-35.
- 佐藤信之・白井正樹・菅野純弥・伊藤憲彦・中島慶人・竹内亨 2018. カラス属 *Corvus* による太陽光パネルへの置き石・石落とし行動. 日本鳥学会誌 67: 133-137.

愛しの Special Guest

札幌市豊平区 佐伯 武 美

野鳥写真愛好家のみなさんが普段撮りためた画像ファイルをどのように活用しているかわかりませんが、私の場合10年ほど前からその年の年末に1年分の画像をまとめて映像化しています。カッコつけていえば「私家版スライドショー」。CDラックに眠っているJazzを総動員してBGMに、そして菌の浮くコメントを挿入すれば立派な完成品になります。それをひとりニヤニヤしながら眺めるオタクが私なのです。スライドショーの一角にはSpecial Guestというコーナーが設けてあります。「オウオー」と叫びたくなる心ときめく一瞬をゲットした画像が収まっているのです。そこに入所するのは自分が初めて出会った種、自分の規準に則った珍鳥、希少種などです。この稿を書くにあたってコーナーを覗いて気が付くのは、札幌のような大都会によくぞ来てくれたものだと感謝したくなる種が少なからずいることです。ということで前置きが長くなりましたが札幌市内限定版で、年代を追って私の貧しい資料が収まっているコーナーを覗いてみたいと思います。

2010年12月、フィールドにしている豊平区天神山にナキイスカ現る。その時のキザなコメント「遠い国からの使者、師走30日にももらった一足早いお年玉」

2012年11月、天神山近くの遊歩道でナナカマドの実を啄む2羽の赤い鳥。コメント「ギンザンマシコのような。騒々しいいまの世にありえないと思っていたことが現実になった。嬉しかった。背中カメラがようやく出番となった」

2013年「賓客到来」4月オオマシコ円山公園、5月「特ダネにはくそ笑む」エゾライチョウ西岡公園駐車場。

2014年春「天神山への珍しいお客さん、香港で見たような・ギンムクドリ(写真1)、遠く北からのナキイスカそしてオオマシコ」

2015年12月、豊平区の幹線道路脇のナナカマドにギンザ

ンマシコ、夢中で実を啄んでいました。「車の行き交いが激しい市街地怯えるよりまずは生きること」

2016年「珍客来札」10月豊平公園オジロビタキ、12月天神山「超Rare道内2例目。遥かなる欧州からの迷子モリムシクイ」興奮の色が隠せない記述になりました。当会会長の樋口氏を通して同定をお願いした北大大学院の先崎理之氏は、知人の話として樋口氏に「国内での記録は30~40例あるようだが12月の記録は初めてのようだ。モリムシクイが日本へ渡来するメカニズムとして、秋なのに春のように北上してしまうリバースマイグレーションというのが言われている」と述べておられます。興味深い説だと思いました。このモリムシクイについては野鳥だより187号(2017)に報告しました。

2017年10月豊平公園、イチイ林の間から小型の鳥がズミの枝に舞い上がり、一瞬のうちに姿を消しました。その後、ふとズミの実が成る小枝を見上げると小さなムシクイがせわしなく実をつついて動き回っていました。野鳥調査員の先崎啓究氏に同定をお願いしたところ、カラフトムシクイにほぼ間違いないとのことでした。「去年のモリムシクイといい珍鳥ムシクイに縁があるとはくそ笑む」

同じく2017年の12月、真駒内公園にノハラツグミ。「師走にツグミ4種揃い踏み。ただツグミさん、ハチジョウさん、トラさん、ノハラさん」ただツグミさんとハチジョウさんは亜種どうしですが、別種扱いカウントにしました。

2018年4月豊平公園、「都会の小公園に正装の紳士」ジョウビタキオスを初めて見る。

同じく2018年の11月、豊平公園にオジロビタキ。「尾をピンと立てた姿が凛々しい」

2019年11月天神山、「5年ぶりの再会オオマシコ2019を締める出会いだった」



写真1. ギンムクドリ 2014.3.17 札幌市豊平区天神山



写真2. シマゴマ 2020.5.19 札幌市豊平区豊平公園



写真3. マミジロキビタキ 2020.5.19 札幌市豊平区豊平公園

2020年、現在進行形でスライドショーを作成中です。2月、ノドアカツグミ(ノドグロツグミ亜種)が真駒内公園に飛来し暫く滞在しました。大勢の愛好家やプロの写真家が北海道内外から駆け付け、ジョギングや歩くスキーを楽しむ利用者からブーイングを浴びる事態にもなりました。

当のノドアカツグミといえばシャッター音に加え、同類のほかの鳥(近くにいたツグミ)からヨソ者扱いされて攻撃の対象になり、気の毒な立場に置かれました。肩身の狭い思いの私は、こうコメントを入れてイクスキューズを図りました。「イジメに耐え抜いた忍耐力と生命力。北の地で子たちに受け継がれる」

2020年5月豊平公園、シマゴマ(写真2)「石狩管内では2例目の観察記録」そしてマミジロキビタキ(写真3)。「見たい!撮りたい!5月の天売島バードウォッチングツアーに期待も新型コロナウイルスの蔓延で中止。思いがけずこの小公園で念願かなう」

ある時、私は横浜から来たという写真愛好家に西岡公園で出会いました。アカゲラに会って感激したという話を聞いて驚いたのを覚えています。横浜という都会では見られない種が普通に見られる大都会札幌の公園、時には珍鳥、希少種が訪れる幸運に恵まれることもあります。私のSpecial Guestのコーナーはその時の高揚した瞬間が記録・保存されているアーカイブなのです。野鳥との出会いはこの日この場所この時間。一期一会。歯が浮きます。

浦河町でのブッポウソウの記録

浦河探鳥クラブ 小田左文

日高管内浦河町荻伏市街で国道235号線から入る道道348号線は元浦川に沿って走っており、途中、河口から3.5kmほどのところに元浦川頭首工があります。頭首工とは河川など(ここでは元浦川)から農業用水を取り入れるダムのような施設です。ここはオジロワシ、オオワシや水鳥等が飛来する野鳥観察スポットで、2020年5月19日14時頃、所用が早く終わり立ち寄りました。

たまたまカラスにいたずらされているオジロワシを見ながら車を100m程先に進めると川沿いの電線にカラスではない黒い物体を発見。

持ち合わせていた双眼鏡を覗くと鳥のようですが今まで見たことのない姿かたちでしたので"鳥"と自分を納得させるまでに時間がかかりました。ただ嘴だろうと思われる部分が異様に赤く強烈な印象でした。

車内から写した写真を見てやっぱり"鳥"だったのだと確信。肉眼では黒く見えた羽の色は瑠璃色で、頭頂部はやや平らでした。あまり警戒している様子もなかったので車外で撮影することができました。帰宅後に見た北海道野鳥図鑑(亜璃西社発行)には記載がなく、浦河探鳥クラブのグループライン(スマホ情報ライン)にアップしたところ、ブッポウソウと教えて頂きました。

職場の方がこの前日、通勤途中に目撃したとのラインもあり浦河には少なくとも18日には飛来していたようで

す。その後2週間近く留まっていたのですが、雷を伴う大雨があったせいか、探鳥クラブのメンバーからは5月31日以降は姿を見ることができなかったと知らせがありました。

日高管内全域をみると、浦河町内で2010年6月にただ一度の観察記録があるようですが、この時は、会員の目視のみで撮影画像はありませんでした。静止画、動画ともに収められたのは今回が初めてです。



ブッポウソウ 2020.5.19 日高管内浦河町

九州の鳥・北海道の鳥

福岡県久留米市 池 長 裕 史

日頃、北海道の野鳥記録に関してお世話になっている北海道野鳥愛護会から、このようなテーマで一文を依頼されました。北海道での鳥見の経験の少ない私ですが、気になった九州の鳥についてお話しすることで、北海道の皆さんにも九州の鳥のイメージを描いていただければと思います。

九州のツル (写真1)

北海道のタンチョウに対して九州ではマナヅル、ナベヅルなどの越冬ツルの存在はあまりにも有名ですが、その数について、どれほど多いのかご存じでしょうか？ 実は鹿児島県出水市の「鹿児島県のツルおよびその渡来地」がタンチョウと同じ1952（昭和27）年に特別天然記念物になった年のツル渡来数はわずかに263羽でした（タンチョウは33羽）。その後、餌場やねぐらの保護などにより1989（平成元）年には8,554羽までに増え、さらに2019（令和元）年には15,000羽を超えていて、ますます増加傾向にあります。ちなみにタンチョウも近年は1,500羽前後のようですから、増加率としては同程度なのですね。



写真1. 鹿児島県出水市のツル渡来地（2013年12月）

ホシムクドリ (写真2)

出水市つながりの話になりますが、ホシムクドリは1969～70年の冬に同市で記録されたものが最初のようなのです。ちなみに、その年のツルの渡来数は1,798羽、ツルを観察していて見つけたのかもしれませんが、けれども、日本鳥類目録第5版（1974年）では掲載を見送られ、第6版（2000年）になって、ほぼ全国的に「迷鳥」として掲載されました。北海道では1987年に利尻島で1羽が観察されて以来、2000年代になってからは毎年少数が記録されています（西沢ら 2019）。九州では、迷鳥というよりも冬鳥として局地的ですが集団で渡来していて、1羽だけというのはむしろ少ないようです。50羽程度の集団を見ることも珍しいことではありません。ムクドリの仲間には他にもギンムクドリのように各地で見られるようになった種もいます。ホシムクドリもこれからますます個体数は増えそうですが、日本国内で繁殖する日が来るのでしょうか？



写真2. ホシムクドリ（佐賀空港：2014年1月）

ヘラサギ類 (写真3、4)

ヘラサギ類は全国的に珍しい鳥で、クロツラヘラサギは国際的にも稀少鳥とされています。近年の九州ではクロツラヘラサギは冬鳥として珍しくなく、2019年の調査では、国内全体で計538羽が確認されましたが、そのうち九州・沖縄では熊本県で205羽、福岡県138羽、鹿児島県61羽、佐



写真3. クロツラヘラサギ（佐賀県大掾^{だいじゅうがらみ}：2016年3月）



写真4. ヘラサギ類（福岡県筑前町：2020年2月）

賀県43羽、沖縄県25羽、宮崎県で21羽が確認されました。特に有明海沿岸では最近では1箇所に30羽以上が越冬していて、一部の非繁殖個体は越冬しています。2000年代の始めには全国で100羽程度でしたから、これもずいぶん増えた鳥だといえます。

ツクシガモ (写真5)

最近増えている鳥といえば、ツクシガモも奇妙な増加傾向にあります。ツクシガモは冬鳥として渡来しますが、そのほぼ9割が九州から記録されています。その名の由来となる筑紫国は現在の福岡県西部と南部に該当します。1970年代から80年代は福岡県のツクシガモの個体数はそれほど多くはなくて、むしろ長崎県が多かったのですが、これは諫早干拓の広大な干潟が存在したためです。2000年以降は長崎県では10羽前後が記録されるに過ぎなくなりました。90年代に入って、福岡県の個体数が増えて、2000年代の初期には1,000羽を超える数が記録されたこともあります。現在は数百羽で推移しています。一方、福岡と長崎の間の佐賀県での個体数は70年代から80年代は数百を記録していましたが、90年代は数十のレベルに落ち込んでいました。ところが、ここ数年は佐賀県の有明沿岸で数千羽のツクシガモが記録されています。ツクシガモは90年代以降、大阪と岡山でも100羽の単位で記録されているようです。なにが起こっているのでしょうか？



写真5. ツクシガモ (大授翫：2014年1月)

カモメ類 (写真6、7)

私に関東にいた頃は冬の銚子でたくさんのセグロカモメ類を見ていましたが、夏の北海道ではオオセグロカモメが普通に繁殖していて、冬には流氷の上にワシカモメやシロカモメが普通に見られることに感激したことがあります。一方、九州では、これらのカモメ類に代わって独特なセグロカモメ類などに会います。

写真の2羽は一見、セグロカモメ風ですが、1羽は脚が黄色く、もう1羽は頭が白っぽく脚も長く見えます。関東で見ていたセグロカモメとはずいぶん違います。ホイグリセグロカモメやモンゴルセグロカモメと呼ばれるカモメは冬の銚子にも少数は見られているようですが、九州ではむしろこのような「通常ではないセグロカモメ類」ばかりのようです。

それから、もう一つの九州のカモメ、ズグロカモメも紹介しておきます。90年代には、北部九州を中心に約1,000羽が冬鳥として渡来しています(武下 1996)。近年は、



写真6. 2羽のセグロカモメ類 (熊本県八代市：2016年2月)



写真7. 夏羽のズグロカモメ (大授翫：2016年3月)

さらに個体数が増えているように思われます。

ここまで取り上げた「増えている鳥」ですが、日本国内では増加傾向にあっても、世界的に増えているとは限らないようです。繁殖地や越冬地にどんな変化があるのでしょうか？

ベニアジサシ (写真8)

有明海に作られた福岡県大牟田市の人工島の三池島にベニアジサシの最北繁殖コロニーが見つかったのは1994年のことですが、それ以来、多い年には500羽を超える渡来があり夏鳥として繁殖が続いてきました。けれども近年は2014年に繁殖が確認されて以来、繁殖の確認できない状況が続いています。今年で6年連続となると、このまま繁殖コロニーとしては消滅してしまうかも知れません。今年も



写真8. 三池島のベニアジサシ (2013年8月)

来ると思っていた夏鳥が、ある日ふっといなくなる。三池鳥は、今は人が入らない場所ですので、自然の成り行き次第というところがありますが、保護の手立てを思案中です。

カササギ (写真9)

カササギといえば九州の鳥というイメージが強いのですが、ご存じの通り、最近では北海道でもカササギの繁殖・定着が見られています(黒沢・堀本 2015ほか)。今年1月の西日本新聞(九州の地方紙)の佐賀県版に「県鳥カササギ減った? 分布域、佐賀県外に拡大 天敵カラス増 影響か」という記事が掲載されました。もともと九州のカササギは佐賀平野を中心に局地的な分布をしていたようですが、その個体数と分布域には何度かの転換期があったようです。個体数については1970年代半ばから急激に営巣数を増やして90年代半ばにピークに達した後は現在まで減少傾向にあること、一方、開発による森林消失という環境の変化で、生息域の障壁が消失したことにより分布拡大が進んでいるということが示されています(江口 2016)。有明海から八代海にかけて海岸沿いに熊本県南部にも分布を広げているようです。高密度・局地的分布から低密度・広域分布へと変遷を遂げつつあるのかも知れません。北海道での分布域の推移にも注目です。

ところで、「東のオナガ、西のカササギ」といわれることもあり、オナガとカササギは分布が離れているように思われがちですが、九州北部にもかつてはオナガが繁殖分布していました。それが、いつ頃、どんな経過で消えてしまったのか? 残念ながら、ほとんど記録が残っていません。わずかに「1961年10月千代田町で観察されたものを最後に見られなくなった」(佐賀県 1978)、「1963年7月、久留米市、幼鳥2」(福岡県の自然を守る会 1978より)などに情報が残るのみです。

夏鳥、冬鳥を問わず、初認記録はデータ化されやすいものですが、終認の記録はなかなか取りにくいものです。種の存在となると、いつ来ていつ消えたのかはその理由を探る上で大事な記録といえます。



写真9. カササギと巣 (福岡県久留米市: 2019年3月)

ツリスガラ (写真10)

増えたり減ったりしている鳥のひとつにツリスガラが挙げられます。鳥類目録第5版では1800年代の古い記録しかなかったこの鳥が全国的に記録されるようになったのは1970年代以降のことのようです。野鳥誌の記録では1974年

に熊本県横島干拓で10羽の報告の後、80年代にかけて九州各県から東に記録を広げ、近畿や中部から、90年代には関東でも小群が見られたりするようになりました。なぜか2000年代に入ってから関東地方での観察例はほとんどなくなりましたが、九州では各県で少数ながら冬鳥として観察されています。

日本への渡来の増減の理由はさておき、ツリスガラは冬の九州に探鳥に来られるウオッチャーのお目当ての一つになっているようです。ツリスガラの観察ポイントは冬枯れしたアシ原というイメージがありますが、むしろ春先の河川敷でヤナギなどの花を訪れて、そこに来る昆虫などを食べている姿もよく見かけます。冬鳥と渡りの通過個体が同時に見られているのかも知れません。

最後に余談ですが、最近、ヤナギ類に訪花する野鳥について日本野鳥の会の論文集Strixに書きましたので、機会があればお読み下さい(池長 2019)。



写真10. ツリスガラ (福岡県筑後市: 2016年3月)

文献および出典

- 江口和洋. 2016. 総説(モノグラフ)カササギ. 日本鳥学会誌65: 5-30.
- 福岡の自然を守る会. 1978. 福岡県の自然 第4集 福岡県の野鳥. 福岡県の自然を守る会、福岡
- 池長裕史. 2019. ヤナギ類に訪花する野鳥と花粉媒介の可能性. Strix 35: 47-55.
- 黒沢令子・堀本富宏. 2015. 北海道胆振地方におけるカササギの分布の変遷. 山階鳥学誌46: 83-88.
- 西沢文吾・倉沢康大・山崎 彩. 2019. 北海道におけるホシムクドリ *Sturnus vulgaris* の飛来状況: 渡島半島における初記録と近年の観察記録の増加. 山階鳥学誌51: 105-115.
- 佐賀県. 1978. 佐賀県の野鳥. 佐賀県、佐賀.
- 武下雅文. 1996. 日本におけるズグロカモメの生息記録. Strix 14: 182-185.
- ツル類の個体数は、出水市およびNPO法人タンチョウ保護研究グループのデータから
- クロツラヘラサギの個体数は、日本野鳥の会の「クロツラヘラサギ調査研究プロジェクト」のデータから
- ツクシガモの個体数は、環境省の「ガンカモ類の生息調査」のデータから

野幌森林公園におけるハイロオウチュウの観察

江別市 池端 耕治

2020年5月13日に江別市野幌森林公園で北海道初記録となるハイロオウチュウを観察・写真撮影したことを報告します。

北海道野鳥愛護会の本拠地である野幌森林公園はよく歩きます。この日は午前7時過ぎに探鳥会の時の集合場所である大沢口から連れ合いと一緒に入り、大沢コースを100mぐらい行ったところの分岐から東側に延びる1.2kmほどの遊歩道であるエゾユズリハコースに入りました。周囲は、カツラ、ヤチダモやシナノキなどの広葉樹に、人工林のアカエゾマツやトドマツの針葉樹が交じり、サルナシなどのつる性植物も見られる所です。林床にはクマイザサやエゾユズリハなどが繁茂していました。ハイロオウチュウが観察された場所は、2018年9月4日の台風21号の影響でシナノキの大木が倒れ、遊歩道の前後左右に50mほどの明るく開けた空間ができていたところでした。この時期は、広葉樹の開葉が始まって間もない時で、野鳥観察がしやすい頃です。

エゾユズリハコースに入って120mほど進んだところで、後方から飛んできたヒヨドリ大の鳥が10mほど先の遊歩道右脇の木に止まりました。双眼鏡を手にした連れ合いが「オウチュウみたい！」と声をあげました。「そんなバカな！」とカメラを向けると幹に隠れていた横顔が現れました。眼の周囲が灰白色で、それは、まさしくハイロオウチュウの顔でした。体が見えると、全体が暗灰色、長くて外側に反った尾。ボルネオ鳥などの探鳥旅行で何度かお目にかかったことがある、私たちにとっては馴染みの鳥でした。いったんは直ぐに飛び立ちましたが、また戻って来て近くの高木の梢辺りを飛び回っていました。これは、暫く近くに居てくれるかもしれないと、森の中に居るはずの野鳥愛護会の早坂氏と松原氏ご夫妻に連絡を取りました。



20分ほどで駆け付けてくれ、合わせて5名で、近くの高木の上をフライングキャッチをしながら飛ぶハイロオウチュウを、遊歩道の100mほどの間を歩きつ戻りつしながら観察しました。観察し始めてから1時間ほど経った後、森の奥へと消えてしまい、その後は二度と現れませんでした。フライングキャッチで採餌を繰り返していたのは、風倒木のために小さいながらもぽっかり空いて明るくなったスペースで、その鳥が好む環境だったと推測されました。次の日以降も同じコースを散策しましたが、残念ながら二度とは観察できませんでした。

ハイロオウチュウはスズメ目オウチュウ科の鳥で、東南アジアの公園などでは普通に近く見られる鳥ですが、日本には本州、四国、九州、南西諸島などに迷鳥として飛来するだけです。近年、観察数は増えてきているようですが、北海道では初めての記録のようです。この鳥が見られた時期には、低気圧が何個も北海道上空にあり、西風が何度も吹いたようです。この風の影響で野幌の森に現れたのではと推測できるかもしれません。

以下、「そうであつたら面白いな」という話を書かせて下さい。ハイロオウチュウの目撃から遡ること3日の5月10日の早朝、同じユズリハコースで、セグロカッコウのような声を聞きました。セグロカッコウはこの2月にボルネオ島の隣のマレー半島で観察し、日本のカッコウに似た声も聞いた鳥なのですが、後日、早坂氏からこのカッコウ科の鳥の托卵相手がハイロオウチュウなどのオウチュウ類だと聞かされました。托卵する鳥と托卵される鳥、もちろん野幌森林公園で托卵が起こるためには、まずはハイロオウチュウが繁殖し、セグロカッコウがペアで飛来し…となるのですが、どちらも迷鳥ですから、こんなことは起こるはずがありません。でも、想像するのは楽しいことです。



ハイロオウチュウ 2020. 5. 13 野幌森林公園

鳥獣保護管理法を読み解く

—現在の狩猟とは？— (その2)

国立研究開発法人 森林研究・整備機構フェロー 川路 則友

前回(その1)では、「鳥獣保護管理法」が、もとは狩猟の規制に関する法律から発していることを説明しました。当初、一部の鳥(保護鳥)だけは捕ってはダメ、という発想だったものが、一部の鳥(狩猟鳥)だけを許可し、それ以外は捕ってはダメという方向へ変わってきました。今回(その2)からは、実際に現在では狩猟はどう規定されているのか、徐々に法律の中身に踏み込んでいきます。

<野生鳥類を捕まえること、卵をとることは原則禁止>

この法律では、わが国で実際に生活しているすべての野生の鳥については、むやみにつかまえることや、鳥の巣から卵をとることを厳に禁じています。この「鳥」には、本来はそこにいないはずでも外から持ち込まれて野外で定着している、いわゆる外来種の鳥についてもすべて適用されます。たとえば大通公園を飛び回っているドバトでも勝手につかまえてはいけないうこととなります。この精神は、この法律の根幹をなすものです。それに違反すると厳しい罰則が科せられます(たとえば一年以下の懲役または百万円以下の罰金)。ただし、例外として、「学術研究のため」などのしっかりとした目的での捕獲を申請し、それが許可された場合(許可捕獲)や、「狩猟鳥」として法律で指定されている鳥を、(狩猟)登録した人が制限された条件のもとで捕獲することなどは認められています。

<狩猟鳥とは？>

この法律の中で、狩猟鳥とは、「希少鳥類ではないこと。肉又は毛皮を利用する目的、管理をする目的等で捕獲を行っても、その生息状況に著しい影響を及ぼすおそれのないもの」の中から環境省が指定する、としています。

野外で生活する鳥は、生まれる数や死亡する数の変化を受け、年により増えたり減ったりすることを繰り返しています。鳥類の死亡原因としては、病気だったり、天敵に襲われ、食べられたり、餌が少なく餓死したり、事故に遭う(車にはねられる、ガラス窓にぶつかる)などが考えられます。そのようにして自分自身の種の数を長年維持してきているわけです。年により生まれた数が多かったり、死亡する数が少なかったりして、全体的に例年に比べて若干、数が増えた分、その余剰分(しかも全体の個体数を左右するまでには至らない数)だけを人間がいただく、というのが「狩猟」の基本的な考え方です。

ですから、余剰分があまり発生しないと思われる鳥(すなわち捕獲によって著しい影響が出るおそれのある鳥)については、狩猟鳥としては本来不適なわけです。たとえば、

キジ類のようにもともと多産系のグループでは、ある程度狩猟で捕られたとしても、環境さえ整っていれば、短期間で数を回復させることができ、野外で一定の個体数を維持できます。そのような鳥が昔から狩猟の対象種として選ばれてきているはずですが、ただし、現実的にはそれだけではなく、やはり単に姿の美しい鳥、肉が美味しい鳥などでも狩猟対象になることがあります。その場合は、たとえば、捕る数を大きく制限するなど、よほどしっかり計画を立てて狩猟を行わないと、すぐにその鳥を絶滅の危機に追いやることになりかねません。ですから、適切な狩猟鳥を選ぶには、本来細心の注意が必要なのです。

<狩猟とは違う有害鳥獣捕獲>

鳥の中には、個体数の急激な増加や環境変化により、農林水産業などの生産業を含む人間の生活や生態系にかなり大きな打撃を与えるものもいます。狩猟には、自主的にそれらを適当に捕獲、除去してやることにより、たとえば生産業による人間の食糧確保のために貢献する、という側面もあります。ただし、「狩猟」にはのちに述べるように多くの制限があります。そこで、たとえば農林水産業に一部の鳥類が多大な被害を与えたとしても、「狩猟」だけでじゅうぶん対応できるわけではありません。そういう場合には、被害に遭った個人、法人等が申請を行い、環境大臣や都道府県知事から捕獲を許可されることがあります。これを有害鳥獣捕獲(駆除)といい、捕獲するのに最も効果的な時期に、必要最小限の期間で、被害を抑えるための最小の数を捕獲するという制限つきで、対処することができます。たとえば、カラスが繁殖期に人間に攻撃して迷惑しているということで、卵やヒナのいる巣を落とすことがあります。これも有害鳥獣捕獲に当たります。ただ、農林業への加害鳥類の捕獲に当たっては、必ずしも被害に遭っている人(たとえば農家)が直接捕まえることができるとは限らないので、実際には狩猟免許を持っている狩猟者に依頼することが多いようです。狩猟などにより全国で捕獲された鳥類の種類、数等については、環境省が報告書として出している「鳥獣関係統計」で確認することができます。この鳥獣関係統計は、毎年環境省から印刷物の形で発行されますので、公的機関等では閲覧することができます。最近のものはネットでも公開されていますので、簡単に参照することができます(<https://www.env.go.jp/nature/choju/docs/docs2.html>)。それを見ると、たとえば平成28年度では、北海道において狩猟で22種10,507羽が捕獲されたことになっています。

有害鳥獣捕獲では、狩猟鳥に限らず毎年全国各地でさまざまな鳥が捕られています。たとえば、平成28年度の北海道では、アオサギ(4羽)、ウソ(30羽)、ウミウ(89羽)、オオセグロカモメ(230羽)・・・などの数値が並んでおり、合計で19種57,570羽も捕られています。これはこの年の全部の狩猟数より多い数です。ウソは桜の名所で花を食したために駆除されたのかな、とまあ想像ができなくもないです



えっ!?! 私たちが何かわるいことをした??

(イラスト 本間康裕)

が、中には不思議な鳥も統計に含まれることがあります。たとえば、平成28年度にはキバシリが岩手県で183羽、滋賀県ではアオバトが2羽、アオバズクが1羽、愛知県ではイソシギが1羽、有害捕獲されたことになっています。いったい彼らがどういう悪さをしたのでしょうか? さらに、岩手県に至っては、「ゾウゲカモメ」が287羽も捕られています。別に間違い探しをしているわけではありませんが、理解に苦しみます。

「狩猟鳥」は、前回(その1)で挙げたように現在は28種に限られています。そのうち、キジの仲間やカモの仲間は、肉や剥製製作などが目的で狩猟されることが多く、カワウ、キジバト、ヒヨドリ、スズメ、カラス類などは、農林水産業への被害を軽減させる目的で狩猟されることも多いようです。参考までに、平成28年度の北海道での一部の狩猟鳥のうち、狩猟で捕られた数と有害捕獲の数を比較してみました(表1)。

表1 平成28年度、北海道における狩猟鳥(一部)の捕獲区分の割合

	狩猟数 (羽)	有害捕獲数 (羽)	全捕獲数のうち 狩猟数の占める 割合(%)
エゾライチョウ	163	0	100.0
コウライキジ	81	10	89.0
マガモ	3,955	194	95.3
カルガモ	1,095	131	89.3
キジバト	148	4,192	3.4
ハシボソガラス	634	20,471	3.0
ハシブトガラス	2,215	25,024	8.1
ヒヨドリ	95	134	41.5
ムクドリ	0	22	0.0
スズメ	95	23	80.5

(平成28年度鳥獣関係統計より)

<狩猟鳥の種類は徐々に少なくなっている?>

狩猟鳥の種類は時代によって変遷してきています。たとえば、1971年に法改正があり、それまで狩猟鳥であったヒシクイ、マガン、ミコアイサ、ワタリガラスが狩猟鳥から外されました。またそれまではすべてのカモ類、アイサ類が狩猟可能であったものを、15種に限定しました。その後、1975年にはカワアイサとオオバンが狩猟鳥から外され、1994年にはウミアイサ、ビロードキンクロ、コオリガモが外されました。一方、その代わりということなのか、害性が強い(農業に被害を与える)という理由で、ヒヨドリとムクドリが狩猟鳥として新たに加えられました。2007年の改正では、カワウが狩猟鳥に加えられましたが、2013年には、個体数が減少しているとしてウズラが狩猟鳥から外されたことは記憶に新しいところです。このように狩猟鳥については、法律改正のたびごとにその見直しが検討されますが、実際には狩猟鳥について信頼できる個体数増減等の正確な統計データがほとんどないために、科学的な根拠での見直しがなかなか進まないのが現状です。

<たとえ狩猟鳥であっても捕獲に制限がかかる>

たとえば狩猟鳥の数が著しく少なくなった場合には、区域を定めて一時的に捕獲を禁止したり、捕獲数を制限することがあります。その禁止や制限は国や自治体が決めます。たとえば、国で決めている禁止事項として、キジとヤマドリでは、全国的にメスを捕ってはならないというものがあります。一般にキジやヤマドリは婚姻形態が一夫多妻制と言われています(ただし、明確な学術的根拠はほとんどありません)。この両種は近年、狩猟による捕獲数がだんだん減ってきている一方ですが、狩猟鳥としての人気は相変わらず高い鳥です。そこで、数をなんとか維持するためには、メスをできるだけ残しておけば、オスは少々減っても大丈夫だろうという判断で、メスだけの捕獲禁止処置が取られてきました。これは、5年ごとに見直しがなされ、個体数の十分な回復が認められれば解除されることもあり得ます。しかし、まだはっきりした狩猟数の回復の兆しが認められないことから、毎回5年間の延長というかたちで、メスの捕獲禁止期間は現在も続いています(ただし、亜種コウライキジは対象から外れます)。北海道では放鳥されたコウライキジが定着していますが、1984年から全道でしばらく捕獲禁止にしたこともあります。これは北海道だけで独自に禁止処置がとられた例です。コウライキジは外来種ですが、我が国に生息する鳥類の一つと認識され、1950年から狩猟鳥に指定されています。

また数を減らさないように、1日に捕れる数を種によって制限する場合もあります。たとえば、エゾライチョウは1日に最大2羽までしか捕れません。キジとヤマドリは合計して最大1日に2羽、カモ類は最大5羽、といった具合です。

(つづく)

2019年度 北海道野鳥愛護会探鳥会記録(2019.4~2020.3)

科・種名	探鳥地	モエレ沼	宮島沼	野幌森林公園	藤の沢	野幌森林公園	千歳川	鶴川河口	野幌森林公園	厚別川	福移	石狩川河口	鶴川河口	いしかり調整池	野幌森林公園	宮島沼	野幌森林公園	室蘭唐松平	野幌森林公園	ウトナイ湖	野幌森林公園	小樽港	野幌森林公園	記録回数
	月日	4/14	4/21	4/28	5/5	5/6	5/12	5/26	6/2	6/9	6/23	8/18	8/25	9/8	9/15	9/29	10/6	10/20	11/3	11/10	12/1	1/19	2/2	回数
カモ科																								
ヒシクイ			●																	●				2
マガン			●														●				●			3
カリガネ																					●			1
シジウカラガン			●																		●			1
コブハクチョウ																					●			1
コハクチョウ																					●			1
オオハクチョウ			●																		●			2
オシドリ						●									●		●							3
ヨシガモ	●	●				●															●			4
ヒドリガモ	●	●					●				●						●		●	●	●			8
マガモ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●				●	●	●	●	●	●	●	●	●	15
カルガモ			●				●	●					●				●					●		6
ハシビロガモ	●	●	●														●	●		●				6
オナガガモ	●	●														●	●			●				4
コガモ	●	●	●			●							●		●		●	●		●	●			10
ホシハジロ																●				●	●			1
キンクロハジロ	●		●			●	●									●	●			●	●			8
スズガモ			●																	●	●		●	4
シノリガモ																							●	1
クロガモ								●																1
ホオジロガモ																					●		●	2
ミコアイサ	●																							1
カワアイサ	●																				●			2
ウミアイサ																							●	1
カイツブリ科																								
カイツブリ	●		●			●		●	●				●		●	●	●			●				10
カンムリカイツブリ		●														●						●		3
ミミカイツブリ																				●				1
ハジロカイツブリ													●			●							●	3
ハト科																								
キジバト	●	●	●	●	●	●		●	●	●				●	●	●		●						13
アオバト								●																1
アビ科																								
オオハム																							●	1
シロエリオオハム																							●	1
ウ科																								
ヒメウ																							●	1
カワウ	●												●			●								3
ウミウ							●		●	●	●	●	●									●		6
サギ科																								
アオサギ	●	●				●	●	●	●	●			●	●		●		●		●				12
ダイサギ													●	●		●					●			4
チュウサギ														●										1
ツル科																								
タンチョウ																						●		1
クイナ科																								
バン								●							●									2
オオバン	●																			●	●			3
カッコウ科																								
ツツドリ					●	●		●		●														4
カッコウ							●		●	●														3
シギ科																								
コチドリ														●										1
オオジシギ										●														1
タシギ														●										1
オグロシギ														●										1
オオソリハシシギ														●										1
コアオアシシギ														●										1
アオアシシギ														●										1

科・種名	探鳥地	モエレ沼	宮島沼	野幌森林公園	藤の沢	野幌森林公園	千歳川	鶴川河口	野幌森林公園	厚別川	福移	石狩川河口	鶴川河口	いしかり調整池	野幌森林公園	宮島沼	野幌森林公園	室蘭唐松平	野幌森林公園	ウトナイ湖	野幌森林公園	小樽港	野幌森林公園	記録回数	
	月日	4/14	4/21	4/28	5/5	5/6	5/12	5/26	6/2	6/9	6/23	8/18	8/25	9/8	9/15	9/29	10/6	10/20	11/3	11/10	12/1	1/19	2/2		
タカブシギ														●										1	
ソリハシシギ												●	●												2
イソシギ												●	●	●											2
トウネン												●	●	●											2
エリマキシギ													●												1
カモメ科																									
ウミネコ								●			●	●	●					●					●		6
カモメ		●																		●			●		3
ワシカモメ																							●		1
シロカモメ																				●			●		2
オオセグロカモメ								●			●	●	●					●		●			●		7
ウミスズメ科																									
ウミガラス																							●		1
ミサゴ科																									
ミサゴ																●									1
タカ科																									
トビ		●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●		●		●	●	●	●	●	●	●	19
オジロワシ		●	●																	●	●		●	●	5
チュウヒ								●			●						●		●		●		●	●	5
ハイタカ																			●						1
オオタカ																			●	●	●				3
ノスリ																	●		●	●					3
フクロウ科																									
フクロウ									●																1
カワセミ科																									
カワセミ							●						●	●											3
キツキ科																									
アリスイ											●														1
コゲラ				●	●	●	●		●						●		●		●	●	●	●	●	●	11
オオアカゲラ					●		●		●						●		●		●	●	●	●	●	●	8
アカゲラ			●	●	●	●	●		●	●			●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	16
クマゲラ															●		●		●	●	●	●	●	●	5
ヤマゲラ				●		●			●						●				●	●	●	●	●	●	7
モズ科																									
モズ													●			●									2
カラス科																									
カケス							●																		1
ミヤマガラス																			●						1
ハシボソガラス		●	●		●	●	●	●	●	●		●			●		●		●		●	●	●	●	13
ハシブトガラス		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	20
クイタダキ科																									
クイタダキ							●										●		●		●				4
シジュウカラ科																									
ハシブトガラ		●	●	●	●	●	●		●						●	●	●		●	●	●	●	●	●	14
ヤマガラ				●	●	●	●		●						●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	12
ヒガラ		●		●	●	●	●		●						●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13
シジュウカラ		●	●	●	●	●	●	●	●	●					●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	18
ヒバリ科																									
ヒバリ		●	●				●				●	●				●									6
ツバメ科																									
ショウドウツバメ											●	●													2
ヒヨドリ科																									
ヒヨドリ		●		●	●	●	●		●	●					●		●	●	●	●	●	●	●	●	15
ウグイス科																									
ウグイス				●	●	●	●	●	●		●				●	●	●								10
ヤブサメ				●	●	●	●		●																5
エナガ科																									
エナガ				●	●		●											●	●	●	●	●		●	9
ムシクイ科																									
オオムシクイ									●																1
エゾムシクイ							●																		1
センダイムシクイ				●	●	●		●																	4

科・種名	探鳥地	モエレ沼	宮島沼	野幌森林公園	藤の沢	野幌森林公園	千歳川	鶴川河口	野幌森林公園	厚別川	福移	石狩川河口	鶴川河口	いしかり調整池	野幌森林公園	宮島沼	野幌森林公園	室蘭唐松平	野幌森林公園	ウトナイ湖	野幌森林公園	小樽港	野幌森林公園	記録回数
	月日	4/14	4/21	4/28	5/5	5/6	5/12	5/26	6/2	6/9	6/23	8/18	8/25	9/8	9/15	9/29	10/6	10/20	10/20	11/3	11/10	11/1	12/19	2/2
メジロ科																								
メジロ					●	●		●							●			●						5
センニュウ科																								
シマセンニュウ											●													1
エゾセンニュウ										●	●													2
ヨシキリ科																								
オオヨシキリ								●		●	●													3
コヨシキリ								●		●	●													3
レンジャク科																								
キレンジャク																						●	●	2
ヒレンジャク																					●		●	2
ゴジュウカラ科																								
ゴジュウカラ				●	●	●	●		●						●		●	●	●	●	●	●		12
キバシリ科																								
キバシリ				●													●					●	●	4
ムクドリ科																								
ムクドリ										●			●			●								3
コムクドリ							●			●	●													3
ヒタキ科																								
クロツグミ				●	●	●	●		●						●									6
アカハラ				●																				1
ツグミ					●																●		●	4
コマドリ				●																				1
ノゴマ											●													1
ノビタキ	●						●		●	●	●	●	●	●										7
コサメビタキ							●		●						●									3
キビタキ				●	●	●	●		●						●									5
オオルリ				●	●	●	●		●						●									5
スズメ科																								
ニューナイスズメ			●		●	●	●			●														5
スズメ	●			●			●		●	●		●											●	7
セキレイ科																								
ツメナガセキレイ															●									1
キセキレイ				●			●							●										3
ハクセキレイ	●			●			●	●	●	●		●	●		●							●		10
セグロセキレイ							●														●			2
アトリ科																								
カワラヒワ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●			19
マヒワ				●																				1
ベニマシコ											●													1
ウソ																					●		●	3
シメ																				●		●	●	3
イカル									●														●	2
ホオジロ科																								
ホオジロ				●														●						2
ホオアカ							●		●	●	●	●												5
カシラダカ				●																				1
アオジ		●	●	●	●	●	●	●	●	●					●	●	●							12
クロジ							●																	1
オオジュリン	●		●				●			●		●			●									6
ハト科 (外来種)																								
カワラバト (ドバト)	●																						●	2
観察種類数	30	26	27	30	30	40	24	32	22	34	10	25	23	26	34	23	23	30	39	18	30	19		
参加者数	51	39	46	34	37	37	34	28	48	19	49	28	33	15	33	26	16	27	13	30	41	36		

※1 宿泊探鳥会を除き、22回実施（6月16日の植苗ウトナイは荒天のため、6月30日と7月14日の野幌森林公園はヒグマ出没による園内立ち入り禁止のため、3月1日の円山公園と3月15日のウトナイ湖は新型コロナウイルスの感染防止のため中止しました）

※2 総観察種 39科 134種、1回平均 27.0種（前年度：40科 128種、1回平均26.1種）

※3 総参加者数 720人、1回平均 32.7人（前年度：681人、1回平均29.6人）



新型コロナウイルスの影響で3月1日の円山公園から、8月30日の鶴川河口までの探鳥会が全て中止になりました。現在のところ、前号(200号)で案内した9月6日のいしかり調整池から、十分な対策をとって再開されています。探鳥会参加の方はこの201号と一緒に送りした「探鳥会再開に向けてのお願い」をお読みください。

【いしかり調整池】2020年10月3日(土)

※土曜日です。ご注意ください。

この時期、いしかり調整池にやってくるシギ・チドリを主に観察します。また、水鳥たちを狙って猛禽類もやってきます。調整池の周りでの観察でほとんど移動はありません。11:30ごろに鳥合わせを行い、自由解散となります。

集 合：いしかり調整池駐車場 9:30

交 通：公共の交通機関はありません。

【野幌森林公園】2020年10月11日(日)、11月1日(日)、12月6日(日)

紅葉の秋から冬へ向かう野幌森林公園を楽しみます。夏鳥はほとんど去りカラ類やキツキ類などが主体となりますが、ツグミやマヒワ、レンジャク類などの冬鳥が見られることもあります。

今年は新型コロナウイルスの影響で、一箇所に集まっていた昼食は感染防止の観点から無しとしました。10月の野幌森林公園の探鳥会も午前日程となり、コースも冬コース(エゾユズリハコース～志文別線・大沢コース～桂コース)となります。12:00ごろ大沢口に戻り、鳥合わせ、解散となります。

集 合：野幌森林公園大沢口 9:00

交 通：JRバス 新札幌駅発(文京台循環線)

「文京台南町」下車 徒歩5分

夕鉄バス 新札幌駅発(文京台南町行)

「大沢公園入口」下車 徒歩5分

【測量山唐松平】2020年10月18日(日)

室蘭測量山直下の唐松平で、主にハイタカ、オオタカ、ノスリ等のタカ類の渡りを楽しみます。タカ類の観察は晴天が必須条件ですが、ここではタカ類以外の鳥たちも観察することが出来ます。11:30ごろの鳥合わせの後は自由解散としますが、引き続き探鳥を楽しむことも可能です。

集 合：唐松平 9:30

交 通：公共の交通機関はありません。

JR室蘭駅からタクシー利用可能。

【ウトナイ湖】2020年11月8日(日)

晩秋のウトナイ湖にはこれから南に渡ったり、近郊で越冬したりするハクチョウ類、カモ類が見られます。渡り途中のマガンやヒシクイなども見られます。これら水鳥類の観察を主体に湖畔をネイチャーセンターまで歩きます。12:00ごろネイチャーセンターの駐車場で鳥合わせをして解散となります。

集 合：野生鳥獣保護センター前 9:30

交 通：道南バス 新千歳空港発(苫小牧発)

「ウトナイ湖」下車 徒歩5分

☆いずれの探鳥会も悪天候でない限り実施します。

☆雨具、観察用具、筆記用具などをお持ちください。

☆問い合わせ 北海道自然保護協会 011-251-5465

10:00~16:00(土日、祝祭日を除く)



いしかり調整池花壇整備作業 2020.6.18 (次ページ参照)

表紙の鳥

ヤマガラ



シジュウカラ科の留鳥です。全長14cmとほぼスズメ大で、雌雄同色です。その昔、おみくじを引く芸を見せるなど、愛嬌いっぱいフレンドリーな野鳥です。初夏のような陽気に誘われて、近所の公園を散歩していると、ひょっこりアカナラの根際に舞い降り、足を踏ん張って嘴いっばいに苔をくわえはじめました。近くで営巣準備を始めたのでしょうか。幸い、ここではエサやりや、執拗に追いかけてくる人もいなく、その可愛らしい姿には逞しい野生の息遣いが垣間見えました。野鳥のビギナーにとって、ほのほのとする嬉しいひとときでした。

藤吉 功(札幌市厚別区)

鳥民だより

◆2020年度 野鳥写真展出展者・作品◆

5月19日から30日まで予定されていた札幌エルプラザでの開催は新型コロナウイルス感染症発生のため中止になりましたが、6月2日から30日までの、野幌森林公園自然ふれあい交流館での開催は予定通り行われました。

- 五十嵐国勝 … オジロワシ、ヤマセミ
 - 児玉 孝博 … エナガ (亜種シマエナガ) 2点
 - 佐伯 武美 … シメ、メジロ
 - 佐藤ひろみ … シマゴマ、マミジロキビタキ
 - 品川 睦生 … アカゲラ、ノゴマ
 - 高島 均 … ツグミ (亜種ハチジョウツグミ)、カササギ
 - 高橋 良直 … マガン、ミユビシギとトウネン
 - 田中 克憲 … アリスイ、エナガ (亜種シマエナガ)
 - 田中 陽 … キリアイ、コマドリ
 - 辻 雅司 … イスカ、シラガホオジロ
 - 中村 隆 … ハイタカ、ヤマセミ
 - 早坂 泰夫 … コクガン、ヤマゲラ
 - 藤吉 功 … キジ (亜種コウライキジ) 2点
 - 吉中宏太郎 … チシマウガラス、アカツクシガモ
- 以上14名 28点



野鳥写真展 (野幌森林公園自然ふれあい交流館)

◆いしかり調整池花壇整備◆

この作業はいしかり調整池を管理する石狩土地改良区と当会の「いしかり調整池利用に関わる確認書」(2018年の野鳥だより193号)に基づくものです。

当日(6月18日)は10人近くの会員の手により、サルビアなどが植えられました(前ページ写真)。シギ・チドリ類などの飛来最盛期の9~10月には満開となる花もあり、きれいな花壇を楽しめることと思います。

◆会員の高橋良直さんが写真集を出版されました!◆

高橋良直写真集「北邦鳥景」Wild Birds in Hokkaido

A4変形版 本文96ページ オールカラー

発行所 (有)ナチュラリー

価格 本体3,000円+税

販売 札幌市北区北9条西4丁目エルムビル8F

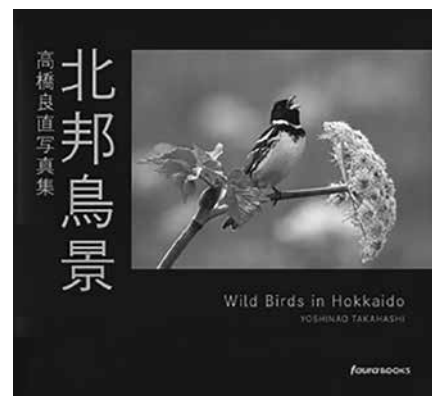
エコ・ネットワーク

または、BRB32264@nifty.com (高橋さんあて)

永らく、本会幹事をおつとめになった高橋良直さんが、写真集「北邦鳥景」Wild Birds in Hokkaidoを出版されました。写真集には、高橋さんが北海道内で20年間にわたって撮影された約100種の野鳥写真が掲載されています。

写真集を開いてみると、どのページも高橋さんの素晴らしい作品が非常に美しくかつ見やすくレイアウトされ、とても見事な出来映えです。どの写真も、季節感豊かで生き生きとして、あるものはダイナミックな躍動感にあふれ、あるものは静謐でありながらも営々とした生命の存在感に満ち満ちています。中でも、私のとびきり大好きなのは、表紙及び本文に掲載されたシマアオジです。素敵な構図と色彩に思わずほれほれとしてしまいます。

どうか、手に取ってひとつひとつの作品をじっくりご覧になって下さい。きっと、時の過ぎてゆくのを忘れてしまうと思います。(紹介 白田 正)



◆創立50周年記念事業について◆

北海道新聞野生生物基金に申請していた「記念誌『私たちの探鳥会 探鳥会50年の記録』の発行およびデータベースの作成」が「鳥類保護助成」の部で認められ、40万円の助成金を得ることができました。現在、発行に向けて作業中です。

なお、他の事業(記念式典・記念講演会、記念探鳥会)については新型コロナウイルスの影響のため予定通りに実行することが困難な状態です。基本的には中止よりは延期の方向で考えています。(記念事業実行委員会)

【新しく会員になられた方】

清野ひとみ (石狩市)

【北海道野鳥愛護会】 年会費 個人 2,000円、家族 3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465

HPのアドレス <https://aigokai.org>